

『続茶経』試訳 (其二)

抄録

中国では、古くより喫茶の風習が広まり、文化として成熟するなかで、茶書が著された。茶書の内容は多岐にわたるが、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など、茶に関わる事を総合的に記した書物の一つに、清の陸廷燦が著した『続茶経』がある。これは、唐の陸羽が著した最古の茶書『茶経』の続篇を標榜し、『茶経』の体例に倣って諸書の記載を輯録、整理したものである。『続茶経』は長期に渡る膨大な記載を収録しており、また、散佚した書物の記載も含まれるなど、中国の茶文化を知る上で欠かすことのできない書物の一つである。しかし、これまで本書が日本語に翻訳されたことはなかった。

そこで、後の茶文化研究に資することを目的として、その日本語訳を試みたい。なお、紙幅に限りがあるため、本稿では『続茶経』の「一之源」の第三十九条から第一〇二条までの訳を示した。

キーワード

『続茶経』、陸廷燦、清、茶書、中国茶文化、翻訳

〈目次〉

はじめに

「一之源」第三十九―第一〇二条

A Trial Translation of *XuChajing* (『續茶経』)

Tanaka, Misa Harada, Makoto

Abstract

Historically, books of tea consisting of various topics, were written in China, while customs of tea were formed, spread, and matured across the country. *Xu Chajing* (『續茶経』) written by Lu Tingcan (陸廷燦) in the Qing (清) era is one of them. It includes producing areas, cultivation, production, drinking, utensils, effects concerning tea. It followed *Chajing* (『茶経』) written by Lu Yu (陸羽) in the Tang (唐) era. So it was titled *Xu Chajing* (『續茶経』) as a sequel to *Chajing* (『茶経』). It contains lots of extracts related to tea, but some of them have been scattered and lost. Therefore, it is valuable literature in the field of studying Chinese tea culture. But it has not been translated into Japanese yet. Our aim is to contribute to the progress of research on Chinese tea culture by showing its translation. To begin with, we have translated its preface, explanatory notes and sections 39-102 in chapter one (「一之源」) in this trial.

Key Words

Xu Chajing (『續茶経』), Lu Tingcan (陸廷燦), Qing (清), books of tea, Chinese tea culture, translation

田中美佐
近畿大学短期大学部教授
原田信
近畿大学経営学部准教授
2018年9月28日受理

はじめに

唐代の陸羽が『茶経』を著して以後、中国では様々な茶書が著された。なかでも清の陸廷燦が編纂した『統茶経』は、茶の歴史から産地、栽培、製造、飲用、茶具、効用など諸書の記載を博搜しており、一大類書といふべき書物である。中国における茶文化の多様なありさまを通覧し、その形成と変遷の過程を知る上で、『統茶経』は十分な参照価値があると言えよう。しかし、本書は一部の記載を除き、これまで翻訳されることはなかった。そこで、訳者はその全訳を試みることにした。

翻訳にあたっては、国立公文書館内閣文庫所蔵の『原本茶経』（雍正十三年陸氏寿椿堂家刻本。陸羽『茶経』と『統茶経』の合刻本、請求記号は子〇六八—〇〇三）を底本とし、原文と和訳をそれぞれ示した。ただし、『統茶経』は版本間に、また引用文とその原本との間に異同が散見する。そこで、方健校注『中国茶書全集校証』（中州古籍出版社、二〇一五年）収録の「校証」に基づき、底本とした『統茶経』には見えるが、引用原典に無い文字は『 』中に示し、『統茶経』における脱字（あるいは省略）は（ ）中に補った。また、底本と他の版本、あるいは底本と引用原典との間の文字の異同は該当箇所の下線を引いた上で（ ）中に示した。以上の衍字、脱字、異同は、訳に適宜反映させた。このほか、陸廷燦によって記された、あるいは引用原文の割注は原文の（ ）中に示し、和訳では原文割注の訳および筆者が補った人名、地名、年代などの説明を（ ）中に示した。

『統茶経』の内容は陸羽『茶経』の体例に従い「一之源」「二之具」「三之造」「四之器」「五之煮」「六之飲」「七之事」「八之出」「九之略」「十之図」に分かれており、末尾に「茶法」が附されている。これに序や凡例を加えると、全体の文字数は十万字近くある。本稿の紙幅は限られるため、以下では「一之源」の第三十九条から第一〇二条までを訳出した。なお、序文、凡例および

び「一之源」の第一条から第三十八条までの訳は、本誌第五十巻一号に掲載した。

第三十九条

【原文】

説郭臆乗、茶之所産、六經載之詳矣。獨異美之名未備。〔唐宋以來〕、見於詩文者（外此無多、頗疑似者不書）尤夥。頗多疑似、若蟾背、蝦鬚、雀舌、蟹眼、瑟瑟瀝、霏霏靄、鼓浪湧泉、琉璃眼、碧玉池、又皆茶事中天然偶字也。

【和訳】

明の陶宗義『説郭』に収録の、宋の楊伯喈『臆乗』には次のようにある。「茶の生産については、経書に詳しく記されている。しかし、その頃は茶の特色や優れた性質に関する評価がまだ確立していなかった。唐、宋の時代以降、茶の評価が多くの詩文に見えるようになった。その修辭は茶葉のことを指しているかどうか疑わしいものが非常に多い。例えば蟾背、蝦鬚、雀舌、蟹眼、瑟瑟瀝、霏霏靄、鼓浪湧泉、琉璃眼、碧玉池といった名称は、いずれも茶を製造し、淹れる過程の茶の状態を表現した対語である。」

第四十条

【原文】

茶譜、衡州之衡山、封州之西郷、茶研膏爲之、皆片團如月。又彭州蒲村棚口、其園有仙芽、石花等號。

【和訳】

五代の毛文錫『茶譜』には次のようである。「衡州（現在の湖南省衡陽市）の衡山、封州（現在の広東省新興県、開平県一帯）の西郷では、茶葉を葉研

で磨り潰して糊状にし、これを固めて団茶にする。団茶はどれも月のように丸い形をしている。また、彭州（現在の四川省彭州市）の蒲村や壩口の茶園の茶には「仙芽」や「石花」などの別名がある。」

第四十一条

【原文】

（明人）高啟月團茶歌序、唐人製茶、碾末以酥瀹爲團。宋世尤精、元時（前自元代以來）其法遂絶。予效而爲之、蓋得其似。始悟古（唐）人詠茶詩所謂膏油首面、所謂佳茗似佳人、所謂緑雲輕綰湘娥鬢之句。飲啜之餘、因作詩記之、并傳好事。

【和訳】

明の高啓（正しくは楊慎）「月団茶歌序」には次のようにある。「唐代の人の製茶法は、まず茶を葉研で磨り潰して粉末状にし、酥の汁を加えて団茶とした。宋の時代、その技術は特に精巧となったが、元の時代になると途絶えてしまった。私はその方法をまねて団茶を作ってみたが、形を似せたものしかできなかった。しかし、団茶を作ることで、古人の詠茶詩にある「膏油首面」や「佳茗は佳人に似たり」（宋の蘇軾「曹輔が壑源に寄せ新芽を試焙するに次韻す」詩）、「緑雲輕綰、湘娥の鬢」（唐の李咸用「僧が茶を寄すに謝す」詩）といった句の意味をようやく理解できた。茶を味わう合間に、詩を作って記録し、この好事を後世に伝える。」

第四十二条

【原文】

屠本峻茗笈評、人論茶葉之香、未知茶花之香。余往歲過友大雷山中、正值花開、童子摘以爲供、幽香清越、絶自可人、惜非甌中物耳。乃予著餅史月表、

以插茗花爲齋中清玩、而高廉益史亦載茗花、（以）足助（吾）玄賞云。

【和訳】

明の屠本峻『茗笈』の「評」には次のようにある。「人々は茶の葉の香りを論じるが、茶の花の香りを知らない。昔、私が大雷山に友人を訪ねたところ、ちょうど茶の花が咲いており、子供が摘んで鑑賞に供してくれた。そのほのかな香りはとても清々しく、極めて心地よかった。残念なのは、それが茶として味わえるものではなかったことである。そこで私は『餅史月表』のなかで、茶の花を生けることを書斎の文雅な楽しみと記した。また、高廉の『益史』も茶の花のことを記しており、それは文人の鑑賞に奥深い趣を加えるものだとしている。」

第四十三条

【原文】

茗笈贊十六章、一曰遡源、二曰得地、三曰乘時、四曰揆制、五曰藏茗、六曰品泉、七曰候火、八曰定湯、九曰點瀾、十曰辨器、十一曰申忌、十二曰防瀝、十三曰戒滄、十四曰相宜、十五曰衡鑑、十六曰玄賞。

【和訳】

屠本峻『茗笈』の「贊」上下篇は十六章に分かれている。第一章は「溯源」、第二章は「得地」、第三章は「乘時」、第四章は「揆制」、第五章は「藏茗」、第六章は「品泉」、第七章は「候火」、第八章は「定湯」、第九章は「点瀾」、第十章は「弁器」、第十一章は「申忌」、第十二章は「防瀝」、第十三章は「戒滄」、第十四章は「相宜」、第十五章は「衡鑑」、第十六章は「玄賞」である。

第四十四条

【原文】

謝肇淪五雜組、今茶品之上者、松蘿也、虎邱也、羅芥也、龍井也、陽羨也、天池也。而吾閩武夷、清源、鼓山三種、可與角勝。六安、雁宕、蒙山三種、祛滯有功而色香不稱、當是藥籠中物、非文房佳品也。

【和訳】

明の謝肇淪『五雜組』には次のようにある。「今、上等な茶には「松蘿」、「虎邱」、「羅芥」、「龍井」、「陽羨」、「天池」がある。そして、我が福建の「武夷」、「清源」、「鼓山」の三種は、これらの茶と甲乙つけがたい。「六安」、「雁宕」、「蒙山」の三種は、身体の滞った気の流れを良くする効用があるも、色や香りは良いと言えない。これらは医者が必要として備えるべき茶であり、文人が書齋で楽しむものではない。」

第四十五条

【原文】

西吳枝乘、湖人於茗、不數顧渚而數羅芥。然顧渚之佳者、其風味已遠出龍井下。芥稍清雋、然葉粗而作草氣。丁長儒嘗以半角見餉、且教余烹煎之法。迨試之、殊類羊公鶴、此余有解有未解也。余嘗品茗、以武夷、虎丘第一、淡而遠也。松蘿、龍井次之、香而艷也。天池又次之、常而不厭也、餘子瑣瑣、勿置齒喙。

【和訳】

明の謝肇淪『西吳枝乘』には次のようにある。「浙江湖州の人々は当地の茶について、顧渚を評価せず、羅芥を評価している。しかし、顧渚の茶でも良質なものの風味は、龍井よりも遥かに良い。羅芥の茶はやや清らかで香り

高いが、葉は粗く草の臭いがする。以前、丁元薦（字は長孺。「儒」は誤り）が私に羅芥の茶を半角贈ってくれて、しかも私にその淹れ方を教えてくれた。そこで試してみたが、全くその評判にそぐわないものであった。このことについて、私には理解できることもあれば、理解できないこともあった。かつて、私が様々な名茶を味わったところ、武夷と虎丘の茶が最も良く、その香りと味わいは淡いながら奥深いものであった。これらの茶に次ぐのは松蘿と龍井であり、香りが立ち華やかな味わいであった。天池がこれらに次ぎ、常に飲んでも飽きない味わいであった。他はありふれた茶であり、論じるに値しない。」

第四十六条

【原文】

屠長卿考槃餘事、虎邱茶、最號精絶、爲天下冠。惜不多産、皆爲豪右所據、寂寞山家、無由獲購矣。天池、青翠芳馨、噉之賞心、嗅亦消渴、可稱仙品。諸山之茶、當爲退舍。陽羨、俗名羅芥、浙之長興者佳、荆溪稍下。細者、其價兩倍天池、惜乎難得、須親自收采方妙。六安、品亦精、入藥最效。但不善炒不能發香而味苦、茶之本性實佳。龍井之山、不過十數畝、外此有茶、似皆不及。大抵天開龍泓美泉、山靈特生佳茗以副之耳。山中僅有一二家炒法甚精、近有山僧焙者亦妙。眞者、天池不能及也。天目、爲天池龍井之次、亦佳品也。地志云、山中寒氣早嚴、山僧至九月即不敢出。冬來多雪、三月後方通行、其萌芽較他茶獨晚。

【和訳】

明の屠隆『考槃餘事』には次のようにある。「虎丘（現在の江蘇省蘇州市にある）の茶は、最も精巧と称えられており、天下に冠たるものである。しかし、残念なことにこの茶は生産量が少なく、すべて有力者や富豪に独占さ

れてしまい、人気のない山林に住む私のような隠士にはとても買うことができない。天池（現在の江蘇省蘇州市にある）の茶は、緑鮮やかで香り高く、口に含めば心を楽しませ、香りを嗅ぐだけで乾きを癒やし、極めて非凡な茶だといえる。他の山々の茶は、全く比べ物にならない。陽羨（現在の江蘇省宜興市）の茶は、俗に羅芥茶といい、浙江の長興（現在の浙江省長興県）のものが良く、荆溪（現在の江蘇省宜興市）のものはやや劣る。なかでも葉の細かい茶の価格は天池の二倍もするが、残念なことに入手が難しく、自ら足を運び摘むしかない。六安（現在の安徽省六安市）の茶も、その品質は良く、薬に加えると最も効果がある。この茶は上手に炒らないと、香りが立たないだけではなく、かえって味が苦くなるが、茶の質自体は良い。龍井山（現在の浙江省杭州市にある）の茶の栽培面積はわずか十数畝に過ぎず、見た目のよく似た茶が産するが、その品質は龍井山の茶に及ばないようである。そもそも、天が龍泓（龍井の古名）にすばらしい泉を湧き出させたので、山の靈気は特に良き茶をその添え物として生み出したのだ。龍井山の茶農家のなかでも、茶葉の炒り方が極めて精巧なのは一、二軒しかなく、近頃では山僧が炒ったものもすばらしい。本物の龍井茶となれば、天池茶も及ばない。天目の茶は、天池や龍井のものに次ぎ、良い茶である。地方志には「天目山（現在の浙江省杭州市にある）は早くに寒さが厳しくなるので、山僧は九月になると外出しようとしめない。冬が来ると雪が多く降り、三月の後になってようやく道を通じる。この気候のため、天目の茶葉は、芽吹くのが他の茶よりも遅い」と記されている。」

第四十七条

【原文】

包衡清賞錄、昔人以陸羽飲茶比於后稷樹穀、及觀韓翊謝賜茶啟云、吳主禮賢、方聞置茗。晉人愛客、纔有分茶、則知開創之功、非闕桑苧老翁也。若云

在昔茶勲未普、則比時賜茶已一千五百串矣。

【和訳】

明の包衡（と張翼の共著）『清賞録』には次のようにある。「昔の人々は陸羽が茶を飲みはじめたことを后稷（古代の帝王堯・舜の宰相、周の先祖）が穀物を植えたことになぞらえる。しかし、唐の韓翊「茶を賜るを謝すの啓」には「呉の君主は賢者を礼遇し、博学な者は酒の代わりに茶を置いて客をもてなした。晋代の人々は客をもてなすのを好んだので、茶の作法が生まれ」とあることから、喫茶の風を切り開いた功績は、陸羽と関係ないことがわかる。昔はまだ茶の効能が広まっていなかったと言う者もいるが、当時でも一千五百串の茶を賜ったのである。」

第四十八条

【原文】

陳仁錫潛確類書、紫琳腴、雲腴皆茶名也。

【和訳】

明の陳仁錫『潜確類書』には「紫琳腴と雲腴は、ともに茶の名称である」と記されている。

第四十九条

【原文】

茗花白色、冬開似梅、亦清香。（按冒巢民芥茶彙鈔云、茶花味濁、無香、香凝葉内。二説不同、豈芥與他茶獨異歟。）

【和訳】

〔潜確類書〕には次のようにある。「茶の花は白く、冬に咲く点は梅にており、爽やかな香りがする」とある。（冒襄の『芥茶彙鈔』には「茶の花には雑味があり、香りは無い。香りは茶葉に凝縮されている」とある。両者の説は異なるが、芥茶だけが他の茶と異なることなどあるまい。）

第五十条

【原文】

農政全書、六經中無茶、茶卽茶也。毛詩云、誰謂荼苦、其甘如薺。以其苦而甘味也。

【和訳】

明の徐光啓『農政全書』には次のようにある。「六經に茶の記載はないが、記載のある茶は茶のことである。『毛詩』の「邶風・谷風」には「誰か謂わん茶の苦きを、其れ甘きこと薺の如し」とある。その苦みを美味としたのである。」

第五十一条

【原文】

夫茶、靈草也。種之、則利博。飲之、則神清。上而王公貴人之所尚、下而小夫賤隸之所不可闕。誠民生食用之所資、國家課利之一助也。

【和訳】

〔農政全書〕には次のようにある。「茶は神秘的な植物である。植えれば利潤を生み出し、飲めば気分爽快となる。上は王公貴人が貴び、下は平民や召使でも欠かすことができない。実に人々の生活必需品であり、国家財源の

一助をなす。」

第五十二条

【原文】

羅廩茶解、茶園（園）不宜雜以惡木、惟古梅、叢桂、辛夷、玉蘭、玫瑰、蒼松、翠竹與之間植、（亦）足以蔽霜雪、掩映秋陽。其下（不）可植芳蘭幽菊（及諸）清芬之品、最忌菜畦相通、不免（穢汗）滲漉、滓厥清眞。

【和訳】

明の羅廩『茶解』には次のようにある。「茶園において、茶樹に混じって悪木が生えるのは良くない。しかし、古梅、叢桂、辛夷、玉蘭、玫瑰、蒼松、翠竹を茶樹の間に植えると、霜雪や秋陽の日差しから茶樹を守ることができ。また、茶樹の下に蘭や菊および香りのある植物を植えてはならず、最も忌むべきは茶樹が野菜畑と接することである。さもないと、汚水が土壌に染み込んで茶樹の清らかさを汚してしまう。」

第五十三条

【原文】

茶地、南向（斜坡）爲佳、（聚水）向陰者（之處）（茶品）遂劣。故一山之中、美惡相懸。

【和訳】

〔羅廩『茶解』〕には次のようにある。「茶畑は南向きが良く、北向きは劣る。それゆえ、一つの山に産する茶葉でも、その品質の良し悪しには大きな差がある。」

第五十四条

【原文】

李日華六研齋筆記、茶事於唐末未甚興、不過幽人雅士手擷於荒園雜穢中、拔其精英、以薦靈爽、所以饒雲露自然之味。至宋設茗綱、充天家玉食、士大夫益復貴之、民間服習寢廣、以爲不可缺之物。於是、營殖者擁溉孳糞、等於蔬藪、而茶亦隕其品味矣。人知鴻漸到處品泉、不知亦到處搜茶、皇甫冉送羽攝山採茶詩數言、僅存公案而已。

【和訳】

明の李日華『六研齋筆記』には次のようにある。「喫茶の風習は唐末でもそれほど盛んではなく、幽雅を好む人士が雑木叢林で手ずから茶葉を摘み、そのなかでも特に良質な葉を選び、その靈妙な性質を世に紹介した。このため、当時の茶葉は自然の精気が作り上げた味に富んでいた。宋代になると茶の大規模な献上が行われ、皇帝の飲用に供された。こうして、士大夫はますます茶を貴ぶようになり、民間でも喫茶の風習が次第に広まり、欠かすことのできないものとなった。そこで、利を貪ろうとする者は茶樹を育てるのに、野菜を育てるかのように灌漑したり肥料を与えたりしたので、茶の品質や味は損なわれた。人々は陸羽が各地で泉水を品評したことは知っているが、各地で茶を探し求めたことを知らない。皇甫冉が陸羽に贈った「撰山採茶」（あるいは「陸鴻漸が棲霞寺に茶を採るを送る」とも）の詩数句は、皇甫冉の詩集に伝わるのみである。」

第五十五条

【原文】

徐巖泉六安州茶居士傳、居士姓茶（茶姓）、族氏衆多、枝葉繁衍遍天下。其在六安一枝最著、爲大宗。陽羨、羅芥、武夷、匡廬之類、皆小宗。（若）

蒙山、又其別枝也。

【和訳】

明の徐巖『六安州茶居士伝』には、次のようにある。「居士の姓は茶である。その一族は大変多く、その同族支流は各地に栄えている。なかでも六安の流れは最も著名であり、嫡流である。陽羨、羅芥、武夷、匡廬の流れは、いずれも庶流である。蒙山は、ここから別れ出た一族である。」

第五十六条

【原文】

樂思白雪庵清史、夫輕身換骨、消渴滌煩、茶薈之功、至妙至神。昔在有唐、吾閩茗事未興、草木仙骨、尚闕其靈。五代之季、南唐採茶北苑而茗事興。迨宋至道初、有詔奉造而茶品日廣。及咸平、慶曆中、丁謂、蔡襄造茶進奉、而製作益精。至徽宗大觀、宣和間、而茶品極矣。斷崖缺石之上、木秀雲腴、往往於此露靈。倘微丁、蔡來自吾閩、則種種佳品不幾於委翳消腐哉。雖然、患無佳品耳。其品果佳、即微丁、蔡來自吾閩、而靈芽眞筍豈終於委翳消腐乎。吾閩之能輕身換骨、消渴滌煩者、寧獨一茶乎。茲將發其靈矣。

【和訳】

明の樂純『雪庵清史』には次のようにある。「心身をとくに生まれ変わったかのように軽やかにして、喉の乾きを潤し苛立ちを解消するのが茶の効用であり、実に神秘的である。かつて唐の時代、我が福建の地では喫茶の風がまだ盛んではなく、茶はその靈妙な性質を隠していた。五代十国の時代、南唐が北苑で茶を生産するようになり、喫茶が盛んとなった。宋の至道年間（九九五～九九七）の初めになると、詔により茶が製造され、その品目は日々増加した。咸平（九九八～一〇〇三）、慶曆（一〇四一～一〇四八）年間に

は、丁謂や蔡襄が茶を製造して献上し、その製造方法はますます精緻になった。徽宗の大観（一一〇七―一一一〇）、宣和（一一一九―一二二五）年間になると、茶の品目の多さは頂点に達した。断崖絶壁や岩の割れ目には、優れた茶樹があり、しばしばその靈妙な性質を示していた。もし、丁謂や蔡襄が我が福建に來なかつたならば、種々の佳品はほとんど枯れ果ててしまっただろう。しかし、そうであつたとしても、佳品がないことを憂えただけにすぎない。もしその品質が本当に良かつたならば、丁謂や蔡襄が我が福建に來なかつたとしても、最上の茶が枯れ果ててしまうことなどなかつただろう。我が福建の茶のなかで、生まれ変わったかのように心身を軽くし、喉の乾きを潤し苛立ちを解消するのは一種類だけではない。ここに、私はその靈妙な性質を示そう。」

第五十七条

【原文】

馮時可茶譜、茶全貴採造、蘇州茶飲徧天下、專以採造勝耳。徽郡向無茶、近出松蘿（茶）、最爲時尚。是茶、始比邱大方。大方居虎丘最久、得採造法、其後、於徽之松蘿結庵、採諸山茶、於庵焙製、遠邇爭市、價忽翔湧。人因稱松蘿（茶）、實非松蘿所出也。

【和訳】

明の馮時可『茶譜』には次のようにある。「茶は何をおいても摘み方と製茶法が重視される。蘇州の茶が天下のどこでも飲まれるのは、ひとえにその摘み方と製茶法が優れているからである。その昔、徽州に茶はなかつたが、近頃は松蘿茶を産し、最も流行している。この茶は、邱大方より始まる。邱大方は虎丘に最も長く住んでおり、製茶法を修得した。その後、徽州の松蘿に庵を結び、諸々の山の茶を摘み、庵で焙煎したところ、各地の人々は争つ

て購入し、価格が急騰した。このため人々はそれを松蘿茶と呼ぶが、実のところ、松蘿で産出したものではない。」

第五十八条

【原文】

胡文煥茶集、茶至清至美物也、世皆不（不皆）味之、而食烟火者又不足以語此。醫家論茶性寒、能傷人脾。獨予有諸疾、則必藉茶爲藥石、每深得其功效。噫、非縁之有自而何契之若是耶。

【和訳】

胡文煥『茶集』には次のようにある。「茶は最も清らかで最も美しいものである。このことは世間の誰もが理解できるわけではなく、火を通したものを食べる世俗の人も茶を語るには足りない。医者は茶の性質が「寒」であり、脾臓を痛めるといふ。しかし、私は病を患えば、必ず茶を薬として飲み、いつもその薬効を深く享受している。ああ、特段の縁もなくして、茶とこのような契を結ぶことができようか。」

第五十九条

【原文】

羣芳譜、蘄州蘄門團黃有一旗一槍之號、言一葉一芽也。歐陽公詩有共約試新茶、旗槍（槍旗）幾時緑之句、王荆公送元厚之詩云、新茗齋中試一旗、世謂茶始生而嫩者爲一槍、寢大而開者爲一旗。

【和訳】

明の王象晋『二如亭群芳譜』には次のようにある。「蘄州の蘄門團黄には「一旗一槍」の称号がある。これは、一つの葉が一つの芽であることを意味

している。欧陽脩の詩（「蝦蟆碚」）には「共に約して新茶（原詩では春芽）を試すも、旗槍幾時か緑たるや」の句がある。また、王安石の「元厚之を送る（正しくは「福建の張比部を送る」）」の詩には「新茗、齋中、一旗を試す」とある。世間では茶葉が芽吹いたばかりの柔らかい芽を「一鎗」といい、次第に大きく開いた葉を「一旗」という。」

第六十条

【原文】

魯彭刻茶經序、夫茶之爲經要矣。茲復刻者、便覽爾。刻之竟陵者、表羽之爲竟陵人也。按羽生甚異、類令尹子文。人謂子文賢而仕、羽雖賢、卒以不仕。今觀茶經三篇、固具體用之學者。其曰伊公羹、陸氏茶、取而比之、實以自況、所謂易地皆然者、非歟。厥後茗飲之風行於中外、而回紇亦以馬易茶、由宋迄今、大爲邊助。則羽之功固在萬世、仕不仕、奚足論也。

【和訳】

明の魯彭「茶経を刻すの序」には次のようにある。「茶書を「経」と称する重要性は以下の理由による。ここに『茶経』を復刻したのは、閲覧の便宜をはかるためである。竟陵で刊刻したのは、著者の陸羽が竟陵の人であることを世に示すためである。考えるに、陸羽の生涯は常人と異なっており、春秋時代の楚の名臣である令尹子文に似ており、ともに捨て子であった。人々が言うに子文は賢くて楚に仕えたが、陸羽も賢者とはいえず、最後まで出仕しなかった。今、『茶経』三篇を見ると、もとより内容は完備しており学問的内容を具えた書物である。陸羽が湯を沸かした風炉に「伊公羹、陸氏茶」の六文字があつたのは、自らを伊尹に擬えたのだが、実際には自らの状況を示したのである。いわゆる「地を易えるも皆然り」という言葉は、誤っていることがあるか。その後、喫茶の風は中華の内外で行われ、ウイグルも馬と

茶を交換するほどであった。宋代から今に至るまで、茶は辺境の交易や平和を維持する助けとなつていく。陸羽の功績は万世に伝わるのであり、彼が出仕したかどうかなど、論じるほどのことではない。」

第六十一条

【原文】

沈石田書芥茶別論後、昔人咏梅花云、香中别有韻、清極不知寒。此惟芥茶足當之。若閩之清源、武夷、吳郡之天池、虎邱、武林之龍井、新安之松蘿、匡廬之雲霧、其名雖大噪、不能與芥相抗也。顧渚每歲貢茶三十二觔、則芥於國初已受知遇。施于今、漸遠漸傳、漸覺聲價轉重。既得聖人之清、又得聖人之時、第蒸采烹洗、悉與古法不同。

【和訳】

明の沈周「芥茶別論の後に書す」には次のようにある。「古人が梅花を詠んだ詩（唐の崔道融「梅花」）には「香の中、別に韻有り、清極まりて寒を知らず」とある。これは芥茶にのみ相当する表現である。福建の清源や武夷、呉郡の天池や虎丘、武林の龍井、新安の松蘿、匡廬の雲霧の茶は、その名が大いに喧伝されているとはいえず、芥茶に匹敵するものではない。顧渚は毎年三十二斤の茶を貢納しており、芥茶は清の初期から高い評価を受けてきた。この茶は今に至るまで伝わっており、その名声はますます遠くへと伝わり、いよいよ人々に重んじられるようになった。芥茶には古代の聖人伯夷のような清廉さがあり、孔子のように時勢に適応する徳もある。ただし、製茶、喫茶の法は、すべて古と異なる。」

第六十二条

【原文】

李維楨茶經序、羽所著君臣契三卷、源解三十卷、江表四姓譜十卷、占夢三卷、不盡傳而獨傳茶經、豈（以）他書人所時有、此爲躋長、易於取名耶。太史公曰、富貴而名磨滅、不可勝數、惟俶儻非常之人、稱焉。鴻漸窮厄終身、而遺書遺跡百世（之）下寶愛之、以爲山川邑里重。其風足以廉頑立懦、胡可少哉。

【和訳】

明の李維楨「茶経序」には次のようにある。「陸羽が著した『君臣契』三卷、『源解』三十卷、『江表四姓譜』十卷、『占夢』三卷はほとんど散佚し、『茶経』のみが伝わった。他の書物は時折所有している人がいるが、『茶経』は特に専門的な書物であるから、容易に有名になったのだろうか。司馬遷は「富貴にして名の磨滅するは、数えるに勝うべからず、惟だ俶儻非常の人は称せらる」と述べている。陸羽は生涯困窮していたが、その著書や事績は百世の後までも尊ばれ、山川や故郷のように重く不変である。その気風は人々を感化するのに十分であり、何が足りないというのか。」

第六十三条

【原文】

楊慎丹鉛總錄、茶、卽古茶（茶）字也。周詩記茶苦、春秋書齊茶、漢志書茶陵、顔師古、陸德明雖已轉入茶音而未易字文也。至陸羽茶経、玉川茶歌、趙贊茶禁以後、遂以茶易茶。

【和訳】

明の楊慎『丹鉛総録』には次のようにある。「茶は、古の「茶」字である。

周詩には「茶苦」と、春秋には「齋茶」と、『漢志』には「茶陵」と記されている。顔師古や陸徳明はその著書のなかですでに「茶」の音が「茶」に転じているのに、文字を改めなかった。陸羽の『茶経』や盧仝（号は玉川子）の「茶歌」、趙贊の「茶禁」が著されて以後、遂に「茶」は「茶」に取って代わったのである。」

第六十四条

【原文】

董其昌茶董題詞、荀子曰、其爲人也多暇、其出入也不遠矣。陶通明曰、不爲無益之事、何以悅有涯之生。余謂茗椀之事足當之。蓋幽人高士、蟬蛻勢利、以耗壯心而送日月。水源之輕重、辨若淄澠（淄澠）、火候之文武、調若丹鼎。非枕漱之侶不親、非文字之飲不比者也。當今此事惟許夏茂卿、拈出顧渚、陽羨、肉食者往焉、茂卿亦安能禁。壹似強笑不樂、強顏無懼、茶韻故自勝耳。予夙秉幽尚、入山十年、差可不愧茂卿語。今者驅車入閩、念鳳團龍餅、延津爲淪、豈必士思如廉頗思用趙。惟是絕交書所謂心不耐煩而官事鞅掌者、竟有負茶竈耳。茂卿能以同味諒吾耶。

【和訳】

明の夏樹芳『茶董』に董其昌が寄せた「題詞」には次のようにある。「荀子には「其の人と為りや暇多きは、其の出入遠からず」とある。また陶弘景の「梁の武帝に上りて論ずるの書」（実際は張彦遠『歴代名画記』卷二）には「無益の事を為さず、何を以てか有涯の生を悦ばん」とある。私が思うに、茶のことはこれらの言葉に言い尽くされている。思うに、世を隠れ世俗を超越した人は、権勢や金銭と距離をおき、壮大な志を費やして日々を送っている。水源の良し悪しは、淄水と澠水の水の味を区別するように繊細に行い、火の強弱は、鼎で仙丹を練るように慎重に調整する。隱棲生活を送る友

でなければ親しまないし、詩文を語る酒宴でなければ参加しないのである。いま、このような生き方が許されているのは夏樹芳(字は茂卿)だけである。顧渚や陽羨の茶を摘んでも、権勢をふるう役人が来て持つていってしまうが、夏樹芳がどうしてこれを禁ずることができるだろうか。もっぱら作り笑いをして楽しむことがないとしても、茶の含蓄や情緒が自然と勝るだけである。私は平素より人里を離れて静かに暮らす考えがあり、山に住むこと十年、茂卿の言葉に悼ることは少しもない。今馬車に乗って福建の地に入り、龍鳳茶団を思い、この再会の地で茶を煮よう。戦国時代の廉頗のように、自分を理解する者だけに仕えようとする必要はあるまい。三国の嵇康「山巨源に与えて絶交するの書」に記された所謂「心、煩に耐えずして官事執筆す」る者は、結局、唐の陸龜蒙のように茶を煮る風炉を持ち歩く隠遁生活を送るしかないのである。同じ生き方を志しているということで、夏樹芳は私を許してくれるだろうか。」

第六十五条

【原文】

童承叙題陸羽傳後、余嘗過竟陵、憩雁橋、觀茶井、慨然想見其爲人。夫羽少厭髡緇、篤嗜墳素、本非忘世者。卒乃寄號桑苧、遁跡茗書、嘯歌獨行、繼以痛哭、其意必有所在。時迺比之接輿、豈知羽者哉。至其性甘茗、味辨淄澠、清風雅趣、膾炙今古。張顛之於酒也、昌黎以爲有所托而逃、羽亦以是夫。

【和訳】

明の童承叙「陸羽伝の後に題す」には次のようにある。「私はかつて竟陵を通りがかり、陸羽に縁のある寺に休み、雁橋を訪ね、陸羽が茶を煮るため水を汲んだ井戸を参観した。すると、その人柄が思い浮かぶようで感慨に

ふけた。陸羽は僧侶を嫌うこともなく、典籍を大変好み、もとより世情を忘れた人ではなかった。しかし、ついには桑苧と号し、茗水と雪水の間に隠棲し、歌を口ずさむ自由な生活を送りながら自らの道を歩み、続けて大いに嘆き悲しんだ。その心には、必ず何か意図するところがあつたのだろう。当時の人々は陸羽を古代の隠者である接輿に擬えたが、それで陸羽のことをわかつているということになるか。茶の性質を良しとし、水の味を弁別する、陸羽の高く清らかな品格と雅趣については、今もなお人口に膾炙している。狂草で知られる唐の張旭が酒を好んだことを、韓愈は世から隠れるための言い訳であると考えた。陸羽もまたそうだったのかもしれない。」

第六十六条

【原文】

穀山筆塵(塵)、茶自漢以前不見於書、想所謂檟者即是矣。

【和訳】

明の于慎行『穀山筆塵』には「茶は漢以前の書物には見えず、思うに、いわゆる「檟」が茶のことなのだろう」と記されている。

第六十七条

【原文】

李贄疑耀、古人冬則飲湯、夏則飲水、未有茶也。李文正資暇錄謂茶始於唐崔寧、黃伯思已辨其非。伯思嘗見北齊楊子華作邢子才魏收勘書圖已有煎茶者。南總記談謂飲茶始於梁天監中、事見洛陽伽藍記。及閱吳志韋曜傳賜茶苻以當酒、則茶又非始於梁矣。余謂飲茶亦非始於吳也、爾雅曰、檟、苦茶。郭璞註、可以爲羹飲、早採爲茶、晚採爲茗、一名苻。則吳之前亦以茶作飲矣。第未(必)如後世之日用不離也。蓋自陸羽出、茶之法始講。自呂惠卿、蔡君謨

輩出、茶之法始精、而茶之利國家且藉之矣。此古人所不及詳者也。

【和訳】

明の李贄（正しくは張萱）『疑耀』には次のようにある。「古の人は冬になれば湯を飲み、夏になれば水を飲み、まだ茶はなかった。唐の李文正（李匡父。あるいは李匡文とも）『資暇録』には「茶は唐の崔寧に始まる」とあるが、宋の黄伯思はすでにその非を弁じている。黄伯思はかつて北斉の楊子華が描いた「邢子才・魏收勸書図」に煎茶があるのを見たことがある。また、宋の佚名『南牕記談』には「茶を飲むことは梁の天監年間に始まった」とあり、このことは東魏の楊銜之『洛陽伽藍記』に見える。しかし、『三国志』の「吳志・韋曜伝」には「茶芽を賜り酒の代わりとした」とあることから、茶は梁代に始まったのではないことがわかる。私が考えるに、茶を飲む習慣は呉に始まったのではない。『爾雅』に「檟、苦茶」とあり、郭璞の注には「羹にして飲むことができる。早い時期に摘んだものを茶といい、遅い時期に摘んだものを茗という。また、芽ともいう」とある。つまり、吳より前にも茶を飲んでいたのである。ただ、この時は必ずしも後世のように日常欠かせないほど飲んでいただけとは限らない。思うに陸羽が登場してから、製茶や喫茶の方法が重んじられるようになった。また、呂惠卿や蔡襄が現れてからこれらの方法は精緻になり、茶が国家を利することもこうして行われるようになった。これらは、古の人が詳しく言及していないことである。」

第六十八条

【原文】

王象晉茶譜小序、茶、喜木也。一植不再移、故婚禮用茶、從一之義也。雖兆自食經、飲自隋帝、而好者尚寡。至後興於唐、盛於宋、始爲世重矣。仁宗賢君也、頒賜兩府、四（八）人僅得兩（一）餅、一人分數錢耳。宰相家至不

敢碾試、藏以爲寶、其貴重如此。近世蜀之蒙山、每歲僅以兩計。蘇之虎邱、至官府預爲封識、公爲採製、所得不過數觔。豈天地間尤物、生固不數數然耶。甌泛翠濤、碾飛綠屑、不藉雲腴、孰驅睡魔、作茶譜。

【和訳】

明の王象晋『二如亭群芳譜』の「茶譜小序」には次のようにある。「茶はめでたい木であり、一度植えたら移植しない。このため、婚礼に茶を用いるのは、一人の人に從うという意味がある。茶は『食経』に始まり、隋の文帝が飲み始めたが、茶を好む者はまだ少なかった。後の唐代になって喫茶の風が興り、宋代に盛んとなったことで、ようやく世に重んじられるようになった。仁宗は賢君であり、茶を兩府（中書門下と樞密院）の宰相に賜ったが、四人でわずか一餅しか入手できず、一人に分けられたのは数錢程度であった。宰相の家でも賜った茶を磨り潰して味見しようとはせず、所蔵して家宝とした。それほど茶は貴重なものだった。近世、四川の蒙山では毎年、わずかな重量の単位である「両」で計量する程度しか生産されなかった。蘇州の虎邱では、官府が予め茶畑を封印して採集、製造したが、生産量は数斤に過ぎなかった。天地の間に存在する優れた物が、常にわずかしか生じないなどということはあるまい。杯に茶の小波をたて、茶を磨り潰す、こうして、すばらしき茶の力を借りなければ、睡魔を追いやることなどできない。そこで、私は『茶譜』を編んだ。」

第六十九条

【原文】

陳繼儒茶董小序、范希文云、萬象森羅中、安知無茶星。余以茶星名館、每與客茗戰。（今）旗槍標格、天然色香映發、若陸季疵復生、忍作毀茶論乎。夏子茂卿叙酒、其言甚豪。予曰、何如隱囊紗帽、翛然林澗之間、摘露芽、煮

雲腴、一洗百年塵土胃耶。熱腸如沸、茶不勝酒。幽韻如雲、酒不勝茶。酒類
俠、茶類隱、酒固道廣、茶亦德素。茂卿、茶之董狐也、因作茶董。東余陳繼
儒、書於素濤軒。

【和訳】

明の夏樹芳『茶董』に陳繼儒が寄せた「小序」には次のようにある。「北宋の范仲淹は「森羅万象のなかに、どうして茶の星がないのか」と述べている。そこで、私は自らの居所を「茶星」と名付け、いつも客と鬪茶を楽しんでいた。今の茶葉は品質が良く、天然の色や香りが引き立っている。陸羽がもし蘇って今の世の茶を喫したならば、『毀茶論』を著すことはなかっただろう。夏樹芳は酒を語っているが、その言葉はとても豪快である。これに対して、私は次のように述べた。「それよりも、隠士の装束に身を包み、気ままに山林小川へ行き、茶の若芽を摘み、茶を煮て、百年世俗の垢にまみれた臓腑を洗い清めたほうがよいのではないか。臓腑が沸騰するかのように身体を温めようとするならば、茶は酒に太刀打ちできない。しかし、流れ行く雲のような奥深い味わいという点では、酒は茶に太刀打ちできない。酒は任俠者のようなものであり、茶は隠者のようなものである。酒は言うまでもなく人の生き方を広げるものであり、茶も人としての徳の素である。夏樹芳は、茶の世界における董狐（春秋時代の史官。権勢を恐れず真実を記した。）である。このため、彼は『茶董』を著した。東余の陳繼儒、素濤軒に記す。」

第七十条

【原文】

夏茂卿茶董序、自晉唐而下、紛紛邾莒之會、各立勝場、品別淄澠、判若南
董、遂以茶董名篇。語曰、窮春秋、演河圖、不如載茗一車。誠重之矣。如謂
此君面目嚴冷、而且以爲水厄、且以爲乳妖、則請效綦毋先生、無作此事。氷

蓮道人識。

【和訳】

明の夏樹芳『茶董』自序には次のようにある。「晋、唐の時代以降、人々は各々の好みを主張して、自分の長所を並べ立て、水の種類を細かく分類した。私は、これら様々な見解を春秋時代の史官である南史や董狐のように断じようと考え、この書物に『茶董』と名付けた。古の人の言葉に「苦勞して『春秋』を探究し、『河図』を推論演繹するよりも、車いっぱい茶を献上して官位を得たほうが良い」というものがある。それほど人々は茶を重んじていたのである。もしこの書を読む者が厳格な方であり、茶を水厄や乳妖と考えるならば、学問だけで身を立てようとした綦毋先生（西晋の魯褒『錢神論』の登場人物。）に倣えば良い。氷蓮道人記す。」

第七十一条

【原文】

本草、石蕊、一名雲茶。

【和訳】

明の李時珍『本草綱目』には「石蕊は雲茶ともいう」とある。

第七十二条

【原文】

卜萬祺松寮茗政、虎邱茶、色味香韻、無可比擬。必親詣茶所、手摘監製、
乃得眞産。且難久貯、即百端珍護、稍過時、即全失其初矣。殆如彩雲易散、
故不入供御耶。但山崑隙地、所産無幾。又爲官司禁據、寺僧慣雜賈種、非精
鑒家卒莫能辨。明萬曆中、寺僧苦大吏需索、薙除殆盡。文文肅公震孟作薙茶

説以譏之、至今眞産尤不易得。

【和訳】

明末清初のト万祺『松寮茗政』には次のようにある。「虎邱の茶は色・味・香り、ともに比類なきものである。この茶は自ら産地に赴き、その手で摘んで製造工程を監督することで、ようやく本物を得ることができる。また、長期間保存することが難しく、手段を尽くして大切に保管したとしても、わずかな時間がたつと、当初の風味は失われてしまう。これは大空に浮かぶ彩雲がすぐに消えてしまうようなもので、そのため朝廷への貢物とはされなかった。虎邱茶の産地は険しい山のわずかな合間にあり、その生産量はいくらかもない。しかも、産地は役所が私有を禁じており、当地の僧侶達は偽の茶葉を混入することに慣れているので、鑑定に精通した者でなければ真贋を見分けることができない。明の万暦年間、僧侶達は高官の厳しい取り立てに苦しみ、茶樹のほとんどを切り倒してしまった。このことについて、文震孟は『薙茶説』を記し諷刺した。今でも本物の虎邱茶を手に入れるのは実に難しい。」

第七十三条

【原文】

袁了凡羣書備考、茶之名、始見於王褒僮約。

【和訳】

明の袁黄『群書備考』には「茶という名称は、漢の王褒『僮約』に初めて見える」とある。

第七十四条

【原文】

許次杼（杼）茶疏、唐人首稱陽羨、宋人最重建州。於今貢茶、兩地獨多。陽羨僅有其名、建州亦非上品、惟武夷雨前最勝。近日所尚者、爲長興之羅芥、疑卽古顧渚紫筍。然芥故有數處、今惟峒山最佳。姚伯道云、明月之峽、厥有佳茗、韻致清遠、滋味甘香、足稱仙品。其在顧渚、亦有佳者。今但以水口茶名之、全與芥別矣。若歙之松蘿、吳之虎邱、杭之龍井、並可與芥韻頌。郭次甫極稱黃山、黃山亦在歙（中）、去松蘿遠甚。往時士人、皆重天池、然飲之略多、令人脹滿。浙之産曰鴈宕、大盤、金華、日鑄、皆與武夷相伯仲。錢塘諸山、産茶甚多、南山儘佳、北山稍劣。武夷之外、有泉州之清源、儻以好手製之、亦是武夷亞匹。惜多焦枯、令人意盡。楚之産曰寶慶、滇之産曰五華、皆表表有名、在鴈茶之上。其他名山所産、當不止此、或余未知、或名未著、故不及論。

【和訳】

明の許次杼『茶疏』には次のようにある。「唐代の人は茶の最良の産地として陽羨を称え、宋代の人は建州を最も重んじた。今でも、朝廷に献上する貢茶はこの二つの地域のものが多い。しかし、陽羨は名ばかりであり、建州も上質ではなく、武夷山の雨前茶だけが最もよい。近頃、高く評価されているのは、長興（現在の浙江省湖州市）の羅芥茶である。私が思うに、この茶は往時存在したという顧渚の紫筍茶のことではないだろうか。元来、羅芥茶の産地は数ヶ所あったが、現在では峒山で産するものの質が最も良い。姚伯道は「明月の照らす峽谷に良き茶がある。その雅趣は清らかで遠くまで広がり、滋味多くして香り高く、実に非凡な品質の茶である。また、顧渚山にも良い茶がある。今はこれを水口茶と呼ぶが、羅芥茶とは全く異なるものである。一方、歙県の松蘿茶、蘇州の虎丘茶、杭州の龍井茶は羅芥茶と甲乙

つけがたい」と言っている。また、郭次甫は言葉を尽くして黄山茶を称えた。黄山も歙県にあるが、その茶の品質は松蘿茶と大きな差がある。昔の士大夫は、誰もが天池の茶を重んじたが、この茶は少しでも多めに飲むとすぐに腹が膨れてしまう。浙江の茶の産地には、雁宕山、大盤山、金華、日鑄があり、これらの地域で産する茶は、武夷の茶と優劣がつけがたい。銭塘の山々は茶の生産量がとても多く、南山のものほども品質が良く、北山のものはやや劣る。福建では、武夷茶のほかにも泉州の清源茶がある。もし名人がこの茶葉を加工するならば、武夷の茶に匹敵するほどの茶になる。しかし、惜しいことに、多くは熱を加えずに干からびており、興ざめしてしまう。楚（現在の湖北・湖南両省一帯）の茶の産地には宝慶（現在の湖南省邵陽市）があり、滇（現在の雲南省）の茶の産地には五華（現在の雲南省昆明市）がある。いずれも、極めて著名であり、その品質は雁宕茶の上にある。他の名産で産する茶は、当然以上に挙げたものだけではないが、私が知らないものがあるうし、著名ではないものもあるうから、ここでは論じなかった。」

第七十五条

【原文】

李詡戒庵漫筆、昔人論茶、以槍旗爲美、而不取雀舌、麥顆。蓋芽細、則易雜他樹之葉而難辨耳。槍旗者、猶今稱壺蜂翅是也。

【和訳】

明の李詡『戒庵漫筆』には次のようにある。「昔の人々は茶を論ずる際、「槍旗（新芽の形状が槍のように鋭く、湯のなかで旗のように開く茶葉）」を高く評価し、「雀舌（新芽の形状がスズメの舌のような茶）」や「麥顆（新芽の形状が麦粒のように細く小さい茶）」を評価しなかった。おそらく、芽が細いと、茶以外の樹木の葉に混じりやすく、区別しにくかったからである

う。「槍旗」は、今の人が言う「壺蜂翅（新芽がトツクリバチの羽のような形状の茶）」のようなものである。」

第七十六条

【原文】

四時類（纂）要、茶子、於寒露候收、曬乾、以溼沙土拌勻、盛筐籠内、穰草蓋之。不爾、即凍不生。至二月中取出、用糠與焦土種之於樹下、或背陰之地。開坎、圓三尺、深一尺、熟糞、著糞、和土、每坑下子六七、十顆、覆土厚一寸許。相離二尺、種一叢。性惡濕、又畏日、大概宜山中斜坡、峻坂走水處。若平地、須深開溝壟以洩水、三年後、方可收茶。

【和訳】

唐・五代の韓鄂（あるいは韓諤とも）『四時纂要』には次のようにある。「茶の種は、秋が始まる寒露の時に収穫する。これを日に晒して乾かし、湿った砂に入れて均等にかき混ぜ、籠につめて、稲わらをかぶせる。そうしないと、種が凍って発芽しなくなる。種は二月になつてから取り出し、糠と焼いた土に混ぜて、樹の下か日陰になる場所に蒔く。種を蒔く場所には周囲三尺、深さ一尺の穴を掘る。穴はしっかりと整え、糞を入れ、そこに土を混ぜる。一つの穴には種を六、七粒から十粒を入れ、その上に土を厚さ一寸ほどかぶせる。それぞれの穴は二尺ほど距離をあけて掘り、一株を植える。茶樹は湿った土壌や直射日光に弱いので、おおむね山の斜面、傾斜が大きく水はけの良いところが適している。平地では、溝を深く掘り排水すれば、三年後に茶を収穫できるようになる。」

第七十七条

【原文】

張大復梅花筆談、趙長白作茶史、攷訂頗詳、要以識其事而已矣。龍團鳳餅、紫茸驚芽、決不可用於今之世、予嘗論今之世筆貴而愈失其傳、茶貴而愈出其味、天下事、未有不身試而出之者也。

【和訳】

明の張大復『梅花筆談』には次のようにある。「趙長白は『茶史』を著し、とても詳しく考証しているので、ここでは主にこの書物の内容を記す。龍團、鳳餅、紫茸、驚芽といった茶は、今の世では流行し得ない。私はかつて今の世を論じたが、筆は値段が高くなると、製筆の伝統技術が失われ、茶は値段が高くなると、その本来の味や香りをさらに醸し出すようになる。天下の事は、自ら実践してこそ、初めて成果を得ることができる。」

第七十八条

【原文】

文震亨長物志、古今論茶事者、無慮數十家。若鴻漸之經、君謨之錄可爲盡善。然其時法用熟碾、爲丸、爲挺（挺）、故所稱有龍鳳團、小龍團、密雲龍、瑞雲翔龍。至宣和間、始以茶色白者爲貴。漕臣鄭可聞（簡）始創爲銀絲水芽、以茶剔葉取心、清泉漬之、去龍腦諸香、惟新勝（鈔）小龍蜿蜒其上、稱龍團勝雪、當時以爲不更之法。而吾朝所尚又不同、其烹試之法、亦與前人異。然簡便異常、天趣悉備、可謂盡茶之真味矣。至於洗茶、候湯、擇器、皆各有法、寧特侈言烏府、雲屯、（苦節、建城）等目而已哉。

【和訳】

明の文震亨『長物志』には次のようにある。「古今、茶事を論ずる者は、

概ね数十人はいる。なかでも、唐の陸羽『茶経』や宋の蔡襄『茶録』はとても優れた著作である。しかし、当時の製茶法は、蒸した茶を磨り潰し、丸葉状や延べ棒状にした。このため、茶の名称には龍鳳團や小龍團、密雲龍、瑞雲翔龍というものがあった。宋の宣和年間（一一一九～一二二五）になると、色が白い茶を貴ぶようになった。福建転運使の鄭可簡は、はじめて銀糸水芽をつくった。これは茶葉から葉をとり除いて芯だけとし、清らかな泉に浸し、龍腦などの香料を入れず、ただ、身を振った小龍が新たに裝飾され、「龍團勝雪」と称した。当時は、これが絶対的な製茶法だと考えられた。しかし、わが明で貴ばれる茶も、茶の淹れ方も、先人とは異なっている。現在の方法は非常に簡便で、自然の趣をよく具えており、茶の真の味を極めたといつてよい。茶のすぎ方、湯の沸かし方、器の選び方には、それぞれ作法がある。まさか烏府（炭をいれる竹製のカゴ）、雲屯（水を汲む磁器製の瓶）、苦節（竹製の炉）、建城（茶を保管する竹製のカゴ）といった用具の名称を大げさに論じるだけではあるまい。」

第七十九条

【原文】

虎邱志、馮夢楨云、徐茂吳品茶、以虎邱爲第一。

【和訳】

『虎邱志』には「（明の）馮夢楨が言うところによると、（明の）徐茂吳は茶を品評して、虎邱茶を第一とした」とある。

第八十条

【原文】

周高起洞山（芥）茶系、宀茶之尚於高流、雖近數十年中事、而厥産伊始、

則自盧仝隱居洞山、種於陰嶺、遂有茗嶺之目。相傳古有漢王者、棲遲茗嶺之陽、課童藝茶、踵盧仝幽致。故陽山所產、香味倍勝茗嶺。所以老廟後一帶茶、猶唐宋根株也。貢山茶、今已絕種。

【和訳】

明の周高起『洞山芥茶系』には次のようにある。「羅芥茶が上流社会の人士に好まれるようになったのは、せいぜいこの数十年のことではある。しかし、その生産が始まったのは、唐の盧仝が洞山に隠棲し、日陰となる北側に茶を植えてからであり、その後、この場所は「茗山」（茶の山）とされるようになった。言い伝えによると、昔、漢王という者が茗山の南側に隠棲し、子供たちに学問を教えながら茶樹を植え、盧仝の静謐で趣のある生活を受け継いでいた。そのため、洞山の南側「陽山」で生産される茶の味や香りは、北側の「茗山」のものに勝っていた。聞くところによると、現在、老廟の後方一帯で産する茶は、今なお唐、宋の時の茶樹の株から摘まれている。一方、貢山茶は、現在すでに絶滅してしまった。」

第八十一条

【原文】

徐勣茶考、按茶録諸書、閩中所産茶以建安北苑爲第一、壑源諸處次之、武夷之名、未有聞也。然范文正公鬪茶歌云、溪邊竒茗冠天下、武夷仙人從古栽。蘇文忠公云、武夷溪邊粟粒芽、前丁後蔡相籠嘉（籠加）。則武夷之茶、在北宋已經著名、第未盛耳。但宋元製造團餅、似失正味。今則靈芽仙萼、香色尤清、爲閩中第一。至於北苑、壑源又泯然無稱。豈山川靈秀之氣、造物生殖之美、或有時變易而然乎。

【和訳】

明の徐勣『茶考』には次のようにある。「『茶録』等の諸書によると、福建で生産される茶は建安北苑のものが第一等であり、壑源の各所で生産されるものがこれに次ぎ、武夷の名はまだ知られていなかった。しかし、范仲淹の「鬪茶歌」には「武夷溪のほとりにある非凡な茶は天下第一品であって、武夷の仙人が古より栽培してきたものである」とあり、蘇軾の「荔支嘆」には「武夷溪のほとりにある粟粒の茶芽は、まず丁謂、後に蔡襄が籠に茶をいれて次々と皇帝に献上した」とある。すなわち、武夷の茶は北宋の時すでに有名であったが、まだ全盛でなかったにすぎない。しかし、宋、元の時代は団餅を製造しており、茶の真の味は失われていたようである。現在では靈芽、仙萼の茶が、香り色ともに新鮮で爽やかであり、福建では第一の茶である。北苑や壑源では、良い茶が失われてしまい取り上げるべきものはない。自然に具わる山川の靈氣や造物の美事というものは、時勢に応じて変化し変わるのであろう。」

第八十二条

【原文】

勞大與（輿）甌江逸志、按茶非甌産也、而甌亦産茶、故舊制以之充貢、及今不廢。張羅峰當國、凡甌中所貢方物、悉與題鐫、而茶獨留。將毋以先春之採、可薦馨香、且歲費物力無多、姑存之以《稍》備芹獻之義耶。乃後世因按辦之際、不無恣取、上爲一、下爲十、而藝茶之圃、遂爲怨叢。唯願爲官於此地者、不濫取於數外、庶不致大爲民病耳。

【和訳】

明の勞大與『甌江逸志』には次のようにある。「私が考えるに、茶は浙江温州の特産ではなく、この地域でも茶を産するということである。このた

め、昔の制度では茶を貢納品とし、現在まで続いている。明の張璉（号は羅峯）が内閣の首輔になると、自らの出身地である温州の産物の貢納を免除するよう上奏したが、茶だけはそのままとなった。早春に摘んだ茶葉は、祭祀の際に供えることができ、しかも毎年費やす労力や物資も多くないので、ひとまず茶を貢納品のままとして、朝廷へのささやかな贈り物としようとしたのだろうか。ところが後に茶の貢納を実施してみると、誰もが思うままに収奪してしまい、上が税率をひと定めても、下は十を課すような状況で、茶畑は、とうとう怨嗟の聲が満ちる場所となってしまった。この地で役人となったものが、法外に搾取せず、民衆に苦しみを与えないよう願うばかりである。」

第八十三条

【原文】

天中記、凡種茶、樹必下子。移植、則不復生。故俗聘婦、必以茶爲禮、義固有所取也。

【和訳】

明の陳耀文『天中記』には次のようにある。「おおよそ茶を栽培するならば、茶樹は必ず種から育てなければならぬ。成長してから移植すると、枯れてしまう。そのため、風習として、婚約が成立すると必ず茶を結納品とする。これは、一つの場所にしか根づかないという、茶の持つ性質に由来する。」

第八十四条

【原文】

事物記原、榷茶起於唐建中、正（貞）元之間、趙贊、張滂建議（白）、税

其什一。

【和訳】

宋の高承『事物記原』には次のようにある。「茶の専売制度である「榷茶」は唐の建中年間（七八〇～七八三）に始まり、貞元年間（七八五～八〇五）、宰相の趙贊や塩鉄使の張滂が建議し、茶に十分の一の割合で課税した。」

第八十五条

【原文】

枕譚、古傳注、茶樹初採爲茶、老爲茗、再老爲笋。今槩稱茗、當是錯用事也。

【和訳】

明の陳繼儒『枕譚』には次のようにある。「古の書物の注釈によると、茶樹は初めて葉を摘むものを「茶」といい、年月を経た茶樹を「茗」といい、さらに年月を経たものを「笋」という。今は茶のことを一括りに「茗」と呼ぶが、これは誤用である。」

第八十六条

【原文】

熊明遇芥山茶記、産茶處、山之夕陽勝於朝陽。廟後山西向、故稱佳。總不如洞山南向、受陽氣特專、足稱仙品云。

【和訳】

明の熊明遇『芥山茶記』（『羅芥茶記』ともいう）には次のようにある。「茶の産地では、山でも夕陽の射す場所のほうが、朝日の射す場所に勝る。廟後山の斜面は西向きなので、ここの茶は質が良いと称えられている。しかし、

総じて洞山の南向きの斜面には及ばない。そこは成長を促進する陽の気を実際立って受ける場所なので、産する茶は非凡な品質の茶と言える。」

第八十七条

【原文】

冒襄芥茶彙抄、茶産平地、受土氣多、故其質濁。芥茗産於高山、渾是風露清虛之氣、故爲可尚。

【和訳】

明末清初の冒襄『芥茶彙抄』には次のようにある。「茶は平地に産すると、土の気を多く受けるので、品質は純粹でなくなる。芥茶は高い山に産する。高い山はあたり一帯に風や雨露のもたらす清浄純粹な気が満ちているので、そこに産する茶は貴ぶべきである。」

第八十八条

【原文】

吳拭云、武夷茶、賞自蔡君謨、始謂其味過於北苑龍團、周右文極抑之。蓋緣山中不諳製焙法、一味計多、徇利之過也。余試采少許、製以松蘿法、汲虎嘯巖下語兒泉烹之、三德俱備、帶雲石而復有甘軟氣。乃分數百葉、寄右文、令茶吐氣、復酌一杯、報君謨於地下耳。

【和訳】

明の吳拭（の『武夷雜記』）には次のようにある。「武夷茶をはじめて賞玩したのは宋の蔡襄である。蔡襄はこの茶の味が北苑の龍團茶を越えたと考えたが、私の友人の周右文は武夷茶を殊の外蔑んでいた。おそらく、山中の人々は茶葉の採取や加工に精通しておらず、ひたすら生産量の多さと利益ば

かり追求したからである。私は試みに少しばかり武夷茶の葉を摘み、松蘿茶の方法によって加工し、虎嘯巖の下にある語兒泉の水を汲んで茶を淹れた。すると、味、色、香りがすべて具わり、雲石の気を帯びることで、その風味はさらに深く柔和となった。そこで、私はこの自製の茶葉数百枚を周右文に送った。彼が武夷茶の本領を發揮させることを願いつつ、私はこの茶を一椀地面に注いで、あの世の蔡襄に伝えよう。」

第八十九条

【原文】

釋超全武夷茶歌注（序）、建州一老人、始獻山茶、死後傳爲山神。喊山之茶、始（於）此。

【和訳】

明末清初の釈超全『武夷茶歌』の注〔序〕には次のようにある。「建州（現在の福建省建甌市）のある老人が初めて武夷山の茶を献上した。この老人は亡くなった後、人々に語り継がれて山の神とされた。茶葉の豊作を山の神に大声で祈る「喊山」の風習は、これより始まった。」

第九十条

【原文】

中原市語、茶曰渲老。

【和訳】

『中原市語』には「茶のことを渲老と言う」とある。

第九十一条

【原文】

陳詩教灌園史、予嘗聞之山僧言、茶子數顆落地、一莖而生、有似連理、故婚嫁用茶、蓋取一本之義。舊傳茶樹不可移、竟有移之而生者、乃知晁采奇茶、徒襲影響耳。唐李義山以對花啜茶爲殺風景、予苦渴疾、何啻七椀、花神有知、當不我罪。

【和訳】

明の陳詩教『灌園史』には次のようにある。「私が以前聞いた山僧の話によると、茶の種は数粒が地に落ちても、一株だけが成長し、二株の茶樹が繋がっているかのようになる。このため、婚礼には茶を用いる。思うに、この茶樹の根や幹のように、夫婦が一心同体、仲むつまじくする意味をとったのだろう。古くからの言い伝えに、茶樹を移植してはならないとあるが、結局、移植して根付くものもある。唐の女性詩人晁采が病を患った時、幼馴染の男性より茶を贈られ結ばれたという物語（明の呉大震『広艶異編』に見える）も、ただ先人の影響を踏襲したに過ぎない。唐の李商隱『雜纂』には「花に向きあい茶を啜るのは、美しい風景を損なう行為である。しかし、私は喉が乾く病に苦しんでおり、毎日飲む茶は七杯にとどまらない。花の神が察してくださいさるならば、私を咎めることなどあり得ない」とある。」

第九十二条

【原文】

金陵瑣事、茶有肥瘦、雲泉道人云、凡茶肥者甘、甘則不香。茶瘦者苦、苦則香。此又茶經、茶訣、茶品、茶譜之所未發。

【和訳】

明の周暉『金陵瑣事』には次のようにある。「茶葉には肥えたものと痩せたものがある。雲泉道人が言うには、おおむね肥えた茶葉は甘い、甘い香りがない。痩せたものは苦いが、苦いと香り高い。これは『茶経』や『茶訣』、『茶品』、『茶譜』といった茶書で明らかにされていない点である。」

第九十三条

【原文】

野航道人朱存理云、飲之用、必先茶。而茶不見於禹貢、蓋全民用而不爲利、後世權茶立爲制、非古聖意也。陸鴻漸著茶經、蔡君謨著茶譜、孟諫議寄盧玉川三百月團、後侈至（至侈爲）龍鳳之飾、責當備於君謨。然清逸高遠、上通王公、下逮林野、亦雅道也。

【和訳】

明の朱存理『野航文稿』には次のようにある。「賞味するべき飲み物としては、まず茶を挙げなければならない。しかし、茶は『尚書』「禹貢」の記載に見えない。考えるに、この時代、茶は民衆が日常生活のなかで飲んでいただけで、これによって利を得ることはなかったのだろう。後世、茶を専売する「榷茶」が制度化されたが、これは古の聖王や聖人の本意ではない。陸羽は『茶経』を、蔡襄は『茶譜』（正しくは『茶録』）を著わし、諫議大夫の孟簡は盧全に三百片の月団茶を送った。後に、龍や鳳凰の装飾が施された団茶が製造されるほど贅沢になったのは、蔡襄が責められるべきである。しかしながら、喫茶自体は安閑とした生活をもたらす高尚な行為であり、上は王公貴族から下は隠者庶民まで楽しむ、風雅な習慣である。」

第九十四条

【原文】

佩文齋廣羣芳譜、茗花、卽食茶之花。色月白而黃心、清香隱然、瓶之高齋、可爲清供佳品。且蕊在枝條、無不開偏。

【和訳】

清の劉灝等奉勅撰『佩文齋広群芳譜』には次のようにある。「茗花とは、普段飲まれる茶の木に咲く花のことである。色は月のように僅かに青みがかった白色で、中心は黄色く、清々しい香りがほのかに匂い立つ。書齋の花瓶に生けると、高雅な鑑賞に供すべき逸品となる。しかも、花蕊は枝についており、すべて咲き誇る。」

第九十五条

【原文】

王新城居易録、廣南人以荳爲茶、予頃著之皇華紀聞。閱道鄉集有張糾送〈惠〉吳洞荳絶句云、茶選脩仁方破碾、荳分吳洞忽當筵。君謨遠矣知難作、試取一瓢江水煎。蓋志完遷昭平時作也。

【和訳】

清の王士禛『居易録』には次のようにある。「広南（現在の雲南省文山州）の人々は橙を茶として飲んでゐる。このことは、私が近頃著した『皇華紀聞』に記した。宋の鄒浩『道郷集』を見ると、「張糾、吳洞の荳を送る絶句」一首には「茶は修仁を選びて方に破碾せんとし、橙は吳洞を分かちて忽ち当筵す。君謨遠し、難きの作るを知らんや、試みに一瓢の江水を取りて煮よ」と記されている。思うに、この詩は鄒浩が昭平（現在の広西壮族自治区昭平県）に転任する時に詠んだものであろう。」

第九十六条

【原文】

分甘餘話、宋丁謂爲福建轉運使、始造龍鳳團茶上供、不過四十餅。天聖中、又造小團、其品過於大團。神宗時、命造密雲龍、其品又過於小團。元祐初、宣仁皇太后曰、指揮建州今後更不許造密雲龍、亦不要團茶、揀好茶喫了、生得甚好意智。宣仁改熙寧之政、此其小者。顧其言、實可爲萬世法。士大夫家膏粱子弟、尤不可不知也、謹備錄之。

【和訳】

清の王士禛『分甘余話』には次のようにある。「宋の丁謂は福建転運使となり、初めて龍鳳団茶を製造し献上したが、その数は四十餅に過ぎなかった。天聖年間（一〇二三～一〇三三）、再び小団を製造し、その品質は大団を上回っていた。神宗の時、密雲龍の製造が命じられ、その品質は小団を上回っていた。元祐年間（一〇八六～一〇九四）の初め、宣仁皇太后は「建州に命じて、今後、二度と密雲龍を製造してはならない。また、団茶も製造してはならない。上質の茶を選んで飲めば、よい知恵が浮かぶだろう」と言った。宣仁皇太后は王安石が主導した熙寧の政治を改めたが、献上茶の製造廃止はその改変のなかでもごく小さな出来事に過ぎない。しかし、今考えてみると、宣仁皇太后の言葉は、今後永遠に見習うべき掟である。士大夫の家の者、特に富貴な家の子弟は、この言葉の意味を理解しなければならない。そこで、謹んで書き記した。」

第九十七条

【原文】

百夷語、茶曰芽、以麓茶曰芽以結、細茶曰芽以完。緬甸夷語茶曰臘扒、喫茶曰臘扒儀（素）索。

【和訳】

『百夷語』には次のようにある。「少数民族の言葉では、品質の悪い茶を「芽以結」と言い、品質の良い茶を「芽以完」と言う。緬甸（現在のミャンマー）の民族の言葉では、茶を「臘扒」と言い、茶を飲むことを「臘扒儀索」と言う。」

第九十八条

【原文】

徐葆光中山傳信錄、琉球呼茶曰札。

【和訳】

清の徐葆光『中山伝信録』には「琉球では、茶を「札」と発音する」とある。

第九十九条

【原文】

武夷茶考、按丁謂製龍團、蔡忠惠製小龍團、皆北苑事。其武夷修貢、自元時浙省平章高興始。而談者輒稱丁蔡、蘇文忠公詩云、武夷溪邊粟粒芽、前丁後蔡相寵嘉（籠加）。則北苑貢時、武夷已爲二公賞識矣。至高興武夷貢後而北苑漸至無聞。昔人云、茶之爲物、滌昏雪滯。於務學勤政未必無助、其與進荔枝、桃花者不同。然充類至義、則亦宦官、宮妾之愛君也。忠惠直道高名、與范、歐相亞。而進茶一事、乃儕晉公。君子舉措、可不慎歟。

【和訳】

『武夷茶考』には次のようにある。「私が考えるに、丁謂は龍團を製造し、蔡襄は小龍團を製造したが、いずれも北苑での出来事である。武夷における

献上茶は、元代に江浙行中書省平章事となった高興より始まる。茶を論じる

者は、丁謂や蔡襄のことを褒めたたえるが、蘇軾の詩（「荔枝嘆」）に「武夷溪辺の粟粒芽、前丁後蔡相籠加す」とあり、丁謂や蔡襄が北苑の茶を献上していた時、武夷の茶はすでに兩人によって高く評価されていたのである。高興が武夷の茶を献上してから、北苑の茶は次第に聞かれなくなった。

昔の人が言ったことだが、茶というものは、頭の疲れや思考の停滞を取り除き、勉学に務め政治に励む助けとなる。茶の献上は、荔枝や桃花の献上と異なる。しかしながら、嗜好品を献上するという点でその意味を考えてみれば、茶も所詮は宦官や宮女が人君を敬愛するのと何ら変わらない。蔡襄は物事の道理をよく守ったことで名声を高め、名臣として知られる范仲淹や歐陽脩とは変わらないほどであった。だが、茶を献上した点では、小人として知られる丁謂とともに語られている。君子の言行というものは、決して軽率であってはならない。」

第一〇〇条

【原文】

隨見錄、按沈存中筆談云、建茶皆喬木、吳蜀唯叢叢而已。以余所見、武夷茶樹俱係叢叢、初無喬木、豈存中未至建安歟、抑當時北苑與此日武夷有不同歟。（茶經云、巴山峽川）有兩人合抱者、又與吳蜀叢叢之說互異。姑識之以俟參考。

【和訳】

『隨見錄』には次のようにある。「宋の沈括『夢溪筆談』には「建州の茶はすべて喬木であり、吳蜀の茶は叢生の灌木にすぎない」と記されている。私の見聞によると、武夷の茶樹はどれも叢生の灌木であり、当初、喬木はなかった。沈括は建安に行ったことがないのだろうか。あるいは、そもそも当

時の北苑と、沈括のいう武夷とは同じ場所ではないのだろうか。陸羽の『茶経』には「巴山・峡川に二人抱えほどの幹の太い茶樹がある」という。これも呉や蜀にある叢生の灌木とは異なる。ひとまず、読者の参考のためここに記す。」

第一〇一条

【原文】

萬姓統譜載、漢時人有茶恬、出江都易王傳。按漢書茶恬（蘇林曰、茶、食邪反。）（則茶）本兩音、至唐而茶、茶始分耳。

【和訳】

明の凌迪知『萬姓統譜』には次のようにある。「漢の時代には茶恬という姓名の人物があり、『江都易王伝』に見える。『漢書』の茶恬に対する蘇林の注に「茶は、食邪の反」という音注によると、「茶」には元来「ト」と「サ」の二つの音があり、唐代になってから「ト」の音は「茶」と、「サ」の音は「茶」と、分けて書かれるようになったのである。」

第一〇二条

【原文】

焦周焦氏説楛、茶曰玉茸。

【和訳】

明の焦周『焦氏説楛』に「茶を玉茸という」とある。